



生かされ、生きるチカラ。

父の存在を感謝で 受け入れたとき、 家族の心が一つに。

桐生教会 木村江利さん

木村江利さんが高校3年生の時、父がリストラに遭った。決まっていた大学進学を断念し、地元の病院に就職。父は半年後によく職を得たものの、給料の大半を毎日、酔いつぶれるまで飲む酒代とギャンブルの借金返済に費やしてしまう始末。そんな父に対し情けなさや怒りの気持ちを絶えず抱えていた。平成20年の8月、江利さんの親友の父親が心筋梗塞で意識不明になる事態が起こる。急いで駆けつけ、親友に寄り添いながら無事を祈った。病状は一進一退が続く中、親友から、「父の病をとおして、家族の心が一つになれた」という言葉を聞き、自分の父との関係を見つめ直す。少しずつ距離を縮めていく努力を重ねる江利さんに対し、父もまた変わっていった。母の誕生日に父は年齢と同じ本数のバラの花束をプレゼントし、母の顔が喜びに輝く。そんなあたたかなふれあいも生まれた。「いま、家族の心がようやく一つになった」と、江利さんは実感している。



家族とともに、心豊かに

お正月に親戚が集まり、おおぜいでにぎやかに新年を祝うときの親しみやくつろいだ雰囲気は格別で、それはおそらく、どこの家庭にも共通するのではないだろうか。年頭にあたって家族や親戚が会話とふれあいを愉しむなか、お互いの心の栄養を補給しあうという重要な意味あいがあるのかもしれない。

では、どのような会話やふれあいが心の豊かさや安らぎを家庭にもたらすのか。それは家族のあいだの「無財の七施」がポイントになると思います。

お金をかけなくてもできる布施——眼施、和顔悦色施、言辞施、身施、心施、床座施、房舎施の七つのうち、とくに笑顔（和顔悦色施）と、思いやりのこもったやさしい眼差し（眼施）や言葉かけ（言辞施）が大事だと思えます。高級な家具や調度に囲まれるのが豊かな生活ではなく、親や子や孫に、あるいは子や孫が親や祖父母に笑顔で接し、お互いを思いやれる家庭こそが真に豊かなのです。

立正佼成会